

国際姉妹都市米国マニトワック市とのインターネット対談

交流団体名

日本側		相手側		
自治体名	交流団体名	国・地域名	自治体名	交流団体名
千葉県鴨川市		米国	マニトワック市	

交流に至った経緯、特徴

東日本大震災が発生後すぐに、お見舞いの電話があったが、実際に顔を見て直接話がしたいと、マニトワック市長からスカイプを利用したインターネット対談の申し出があり実現した。両市長は、ほぼ同時期に市長になっており、2009年10月に鴨川市民訪問団の一員として市長がマニトワック市を訪れている。

このインターネット対談は、時差のため、鴨川市では午前9時、マニトワック市では午後6時（夏時間：午後7時）に実施している。鴨川市では、丁度朝の打ち合わせの時間にあたることから、市長のほか、副市長、教育長、総務部長、市民福祉部長が出席している。

2011年5月18日、初めてのインターネット対談では、震災後の鴨川市の状況説明のほか、2011年度の姉妹都市交流事業について話された。鴨川市の青少年海外派遣事業は実施するものの、震災と原発の関係で、マニトワック市民訪問団の延期や青少年海外派遣事業の中止の申し出があった。

地域の新聞である房日新聞 <http://www.bonichi.com/News/item.htm?iid=5369>にそのときの様子が掲載されている。

さらに、鴨川市ではスカイプのできる環境が揃ったため、今年度はJETプログラムのOBや姉妹都市との交流事業関係にも、利用することができるようになった。

8月には、鴨川市の中高校生がマニトワック市を訪問した際に、市長表敬訪問の機会があり、そこで市長対談を行った後、事務室で家族対談を行った。初めてわが子を外国に送った方もいたため、顔を見られて安心したようであった。



【マニトワック市と対談】



【モニターにわが子を見つけ】

今後の展望・課題

両市長は、電話よりも相手の顔が見えて話ができるほうがいいと、今後もこのインターネット対談を利用したいと言っている。特に、青少年海外派遣事業では、両市の青少年が市長を相互訪問する。時間を調整することにより、青少年が家族とも話ができることから、継続的に利用する可能性が高い。

2012年度、姉妹都市提携20周年を迎えるにあたり、市長同士のインターネット対談も増えると予想している。

また昨年、青少年海外派遣事業の参加者が帰国後、自宅にパソコンがある家庭については、スカイプ、Facebookの利用の仕方について指導した。インターネットを利用することによって、遠くの友人やお世話になった人々と連絡を取りたいという参加者からの要望でもあった。

青少年海外派遣事業は、姉妹都市マニトワック市でのホームステイの体験を通して、国際的視野を広め、国際感覚を持ち、国際社会に通用するような人材育成を目的に実施している。Facebookを利用することで市としても、参加した子供たちが、その後どのように国際社会に関わり、姉妹都市交流に関わっているか追跡することもできるため、今後もITを利用した姉妹都市交流を実施していこうと思っている。

優れた特色

市長同士のインターネット会談をきっかけに、ホームステイ中の子供たちやその家族にもインターネット利用を通じて国際交流を始めるきっかけを与えており、今後の取組み・普及に期待が持てる。